

## P-097

特別支援学校看護師の  
役割に関する意識の変化川北 史恵<sup>1</sup>、宮崎つた子<sup>2</sup><sup>1</sup>独立行政法人国立病院機構 鈴鹿病院<sup>2</sup>公立大学法人 三重県立看護大学

## 【目的】

特別支援学校に勤務している看護師(以下、学校看護師)は、看護のアイデンティティが揺らぐ経験をしている。一方で専門職種として少人数でやりがいを感じながら役割を遂行しているという報告がある。本研究では学校看護師の役割意識がどのように変化していくのかを明らかにする。

## 【研究方法】

県立の特別支援学校に勤務する学校看護師に役割意識の変化についてインタビューガイドに沿って半構成的面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの方法を用いて整理した。三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を得て実施した(通知番号202003)。

## 【結果】

教育委員会、学校長から研究協力の承諾を受け、本研究への参加に同意を得られた研究協力者のうち12名を分析対象とした。分析の結果、5の【カテゴリー】、9の【サブカテゴリー】、19の<概念>が生成された。学校看護師の役割に関する意識の変化は【経験に基づく役割意識】の変化であった。学校看護師としての経験の積み重ねにより【特別支援学校での看護】を理解し、[多職種での協働連携]が【特別支援学校での看護に必要な条件】であること、[人との繋がり]と[情報を得ること]が【看護の基盤】であると意識していた。さらに医療的ケア児(以下、医ケア児)との関わりから<医ケア児の人生を想像>、<現状の課題から考える今後への期待>といった【視野の広がり】により、[医ケア児が学校生活を送るための環境づくり]の役割意識を内省化していた。

## 【考察】

学校看護師は、自身が置かれた教育現場での環境に順応し、その場のニーズに応じた役割を遂行していこうという意識を持っていることが考えられる。また経験の積み重ねから学び、視野の広がりが学校看護師の役割についての意識を深めていることが考えられる。医ケア児が学ぶための環境をよりよいものとするために、学校看護師へのスムーズな役割移行が必要である。そのため課題解決のための相談や意見交換ができる学校看護師同士のネットワークづくり、他職種・関係者の理解と協力、社会のニーズに応じた役割の検討、環境の改善が必要であると考えられる。

## P-098

病児の「つよみ」の捉えに関する  
探索的検討：病弱特別支援学校の  
小学部の教師を対象に堀田 千絵<sup>1</sup>、吉岡 尚孝<sup>2</sup><sup>1</sup>京都市立芸術大学<sup>2</sup>関西福祉科学大学

## 【目的】

病児を対象とした先行研究の多くは、心理社会的問題を抱えるリスクの高さに着目してきた。学習の遅れによる焦りや劣等感、長期間の療養に由来するいらだちによる衝動性、過保護な家庭環境から依存的・消極的であること、厳しい治療経験からPTSDとなっていること等である(谷口、2014:東大出版会)。一方で病児のつよみにも着眼する必要があるが、その知見の蓄積は乏しい。そこで、本研究は、病弱特別支援学校に在籍する児童の「つよみ」をどのように捉えたらいいか、小学部担当教員を対象とした質問紙調査によって探索的に明らかにすることとする。

## 【方法】

所属大学における倫理委員会承認を得たうえで、調査対象者には調査目的と公表の同意を得たうえで、調査対象者の属性と(1)児童がよく訴える不安、(2)児童のつよみ(強み)を自由に記述するように求めた。北海道から沖縄県における全国の病弱特別支援学校の校長宛に郵送し、小学部担当教員で協力可能な教師に依頼をした。回答後に同封した封筒にて返信を求めた。

## 【結果】

有効回答者は、79名(20代~60代)であった。得られた自由記述についてKJ法等を活用した。特に小学部教師が捉える病児の「つよみ」は大きく3つに分類することができることがわかった。第1に、「児童がそのまま欲求や思いを出せること」、第2に、「好きな活動や興味あることに思う存分取り組むこと」、第3に、「心配かけまいと弱音を吐かずに立ち向かうこと」、以上であった。第1のカテゴリを「つよみ」と捉える記述は少なかった。さらに、学童期の子どもライフステージには見合わないような「事実を客観的に受け止めること」や「多様な経験にもまれており納得しておかれている立場を理解する」という類の記述も目立った。

## 【考察】

治療のつらさを我慢し、家族や教師に迷惑をかけまいと一生懸命前向きに頑張ろうとする姿を病児の「つよみ」と捉える傾向にあることがわかった。苦しい体験を思いのままにあらわしながら、治療へのエネルギーをためていくことのできるその子らしさを保障できる環境が必要であると知見(たとえば、副島、2021:へるす出版)とは符合しない。我慢しなくてもいい場、時間や状況を保障することも教育においては重要な役割であり、そうしたサポートの必要性を浮き彫りにした。